

としょかんだより

6月号



岡山市立灘崎小学校 図書館 2022.6.1

今年も梅雨の季節がやってきました。「梅雨」という言葉の由来には、いろいろな説があり、梅の実が熟す(熟ゆ)ころだからというものと、カビが生えて食べ物がかさり(漬ゆ)やすいからというものがあります。

雨の日には ゆっくり本を読んでもごしてみませんか…?今、図書館では カエルや雨ふりの本を紹介しています☆



こいぬのシロは仲間といっしょにワンワンパトロール隊として、公園を守っています。でも、毎日、雨ばかりでシロはたいくつ。そんなとき、ふしぎなできごとが起こり…!?



夏休み、ハルは偶然出会った少年とキャッチボールの約束をしました。でも、実はその少年は、雨の呪いをかける化け物で…!?



ワン フラスターカード



1さつ本がかりられるよ!

きりって、としょかんにもってこよう♪

☆2023年3月3日までに使いましょう☆

“かさ”のはじまり



雨が降れば、雨がさをさして雨をよけます。夏の日ざしが強いときは、日がさをさして、日かげをつくります。

さて、このかさの歴史は古くて、今から 4700年くらい前の中国の神話に、“きぬがさ（きぬでできたかさ）”という日がさのことがでできます。

この、神話と同じようなきぬがさは、古代の六世紀ごろに、日本につたわりました。百済（いまの朝鮮）の聖明王が、

日本に送ってくれたのです。このかさは、

大きくて“え（もつところ）”がながく、

主人がでかけるときは、めしつかいにさしかけてもらいました。



この“きぬがさ”を使うのは、貴族など身分の高い人だけでした。自分で、

広げたりすぼめたりできる雨がさを、いっぱんの人が持てるようになるのは、

江戸時代になってからです。

このころになると、“じゃの目がさ”そまつな

“番がさ”など、雨をよけるためのいろいろな

かさがつくられました。

しかし、いっぱんの人のおお多くはねだんの高いかさを

使わず、“みのがさ”を身にまとして、雨や雪をよけました。

